

## [特別活動]

# 児童が主体的に動く学級経営の在り方

—プロジェクト活動の実践を中核として—

池田 健二\*

### 1 問題の所在

平成29年告示の「小学校学習指導要領解説 特別活動編」において、学級活動の目標は「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」としている。また、「学級がよりよい生活集団や学習集団へと向上するためには、教師の意図的、計画的な指導とともに、児童の主体的な取組が不可欠である」としている。このことから、学校教育の中で多くの時間を過ごす「学級」は、児童によって主体的に形成された安全で安心できる空間ということが大切であると考えられる。

しかし、実際の教育現場ではどうだろうか。筆者がこれまで見てきた学級は、「児童の主体性を重視する」とはいうものの、教師が統治しやすい学級経営が優先され、様々な活動の決定権は教師がもっている学級が多く見られた。様々な学級ルールが教師によって設定され、そのルールの中で児童は活動する。一見児童の主体性を重視しているように感じるが、あくまで教師の管理下において、という管理的な学級経営であった。そして、それらの学級は、次の学年で「荒れる学級」へ変わるということも多かった。また、筆者が今年度担任している学級の5年生時は、問題行動が頻繁に見られた児童が多数在籍しており、児童が安心して過ごせる学級が形成されているとはいえない状況であった。そのため、児童の自己有用感や学級への帰属意識が低く感じられた。

これらのことから、本研究では、プロジェクト型活動の実践を通して、児童が自治的な集団を形成し、児童一人ひとりが自己有用感を高めながら主体的に学級づくりに関わっていく過程を明らかにし、プロジェクト型活動をどのように展開すると有効なのか考察していく。

### 2 研究の目的

どのようにプロジェクト活動を実践していけば、児童の自治的な活動を促し、自己有用感と主体的な参画を高めることができるのか、毎月の学級アンケートや日々の振り返りノートを評価の材料として、児童の変容を確認しながら検証していく。

### 3 研究の内容と方法

#### (1) 学級集団の実態

対象の集団は、N県公立小学校の第6学年2組25名(男子15名、女子10名)である。実践期間は令和2年4月から令和2年7月までで、筆者が担任している学級である。5年生時は、学級内で複数の男子児童による女子児童へのいじめがあったり、差別的な言動が見られたりした。そのためか、一部の男子児童の行動や言動に対して女子児童は嫌悪感や恐怖心を抱いており、ルールやきまりが成立しなくなり、教室が安心できる場所ではなくなっていた。また、指示待ちの姿勢が顕著で、主体的に行動する様子が少ない。さらに、男女間に壁があり、男子は男子、女子は女子で活動することが基本で、男女とも、自己有用感が低い児童が多い。

6年生に進級して最初にとったアンケートでは「今年はいじめのない学級でありたい」「今年楽しい学級にした」という記述が多くみられたことから、5年生時のような学級集団ではなく、最高学年として、在校生のお手本になるような学級でありたいという思いをもつ児童が多くいることも分かった。

\*新発田市立二葉小学校

## (2) 研究の内容と方法

### ① プロジェクト活動の実践

本研究で実践するプロジェクト活動について、児童には次のように説明する。

- ・プロジェクト活動とは、学級になくても困らないけれど、あると学級がよりよくなる活動を指す。
- ・短期プロジェクトと長期プロジェクトの2つからなる。短期プロジェクトは1週間以内、長期プロジェクトは1か月以内。期間内であれば、途中で活動をやめてもよい。
- ・プロジェクトに所属できる人数は1～3人。活動の途中で加入したり脱退したりしてもよい。
- ・1人3つまでプロジェクトに所属してもよい。
- ・活動する際は、「活動設立書」(図1)を担任に提出し、承認を得てから活動する。
- ・活動が成功したか失敗したかを自分たちで判断し、考察する。学級の成功数が20の倍数分達成したら、お楽しみ会をする。

プロジェクト活動	
1. プロジェクト名	
2. プロジェクトの内容	
3. メンバー	
4. 活動期間	
5. 活動結果と その考察	成功 失敗

図1 実際の活動設立書

以上のルールを基に、学級活動や朝活動の時間を使い、PDCAサイクルを運用しながら活動していく。また、記述式の振り返りを帰りの会の5分を使って行う。基本的にはテーマを設けず、自由に記述してよいこととするが、プロジェクト活動において、停滞したり、よい活動があったりしたときは、意図的にテーマを設定する。

### ② 月1回の学級アンケートの実施と評価

高橋(2015)の研究によると、「成長の考察」と「自分たちで課題を発見する」ことが自治的集団を育むサイクルの最初であり、大切であるとしている。また田中(2013)は、「児童の自己評価の重要性が強調され、児童が評価への参加を通じて所有権を自覚することが必要である」と指摘している。そこで、自己のことや学級の様子について自己評価による振り返りを行う。振り返る項目は以下の4点である。

- ①自分は学級目標を達成するために努力しているか。②自分は学級をよりよくするために活動をしているか。  
③自分は以前の自分よりも成長・進化しているか。④学級は以前よりも雰囲気がよくなっているか。

振り返りは、月末の朝活動10分程度で回答し、最後に自由記述欄に記入し回収、集約し、自由記述から児童の変容が分かる記述を抽出し解釈する。

## 4 研究の実践と考察

### (1) プロジェクト活動

#### ① 活動の提案と導入期(4月～)

児童が主体的に学級運営にかかわる上で、学級が安心できる場所であることは欠かせないと筆者は考えた。そこで、4月の担任発表直後の学級活動で、学級経営の基本方針を児童にプレゼンテーションした(図2)。主な内容は、自分から見た自分のこと、去年担任した6年生児童が分析した私のこと、叱る基準である。安心できる風土が学級にできてきた4月中旬、児童に対してプロジェクト活動を提案した。すると「児童からは面白そう!」「やってみたい!」という、プロジェクト活動に対して肯定的な声が上がった。以下は、プロジェクト活動を提案した日の児童の振り返りである。

担任が絶対に許せないことのキーワード

### 3. けじめ

- ・同じことを3回注意されても直そうという努力が見られない場合は、全力で叱る。
- ・自分ができていないことを棚に上げて、人のことを悪く言うことはゆるさない。

図2 児童に示したプレゼン資料の一部

- プロジェクト活動が大変そうだけど、脳活性化プロジェクトやテスト対策プロジェクトが楽しそうだからやってみたいです。それに長期プロジェクトもおもしろそうなのでしっかりやりたいです。
- プロジェクトは面白そうなのもあったし難しそうなのもあったけど楽しそうだと思います。やってみなければ分からないけどがんばりたいと思いました。やったことがないので楽しみです。

翌日、様々なプロジェクトを設立するために話し合いの時間を設けた。その際、活動の基本的なサイクルである「P（計画）D（実行）C（検証）A（改善）」を指導した。特に「P」の部分が重要で、“そのプロジェクトは何のためにやるのか”“そのプロジェクトをやるとどんなよいことがあるのか”，ねらいがぶれないように指導した。1週間後には20個のプロジェクトが活動していた。児童が主体的に活動に取り組む姿勢が表れた場面であった。計画を入念に行っていたプロジェクトが成功したり，思い付きでやってみたプロジェクトがうまくいかなかったりとあったが，うまくいかなかった場合は，なぜ失敗してしまったのかをしっかりと考察し，すぐに切り替えて別のプロジェクト活動を立ち上げていた。以下は，「20分休みにみんなで体を動かそうプロジェクト」（図3）の児童が書いた振り返りである。



図3 20分休みに体を動かそうプロジェクトの様子

○ぼくは今日，初めてプロジェクト活動を実行しました。みんなとドッジボールをしました。ぼくはできるか不安でした。だけどみんな楽しそうだったのでよかったです。

この振り返りを記入した児童は，5年時に女子児童をいじめていた一人である。「P」の段階から，「学級のみみんなで楽しめることがしたい」という思いをもって準備していた。実際に「D」の場面では，同じプロジェクトの児童と協力して進めており，なんとか成功させたいという思いが伝わってきた。その思いが学級の児童にも伝わったのか，「久しぶりに男女みんなで遊ぶことができて楽しかった」という振り返りも多く見られた。これらの振り返りについては，プロジェクト終了後に全体にフィードバックした。自分たちで考えたプロジェクトで，学級のみみんなが喜んでくれたことを知った児童の自信につながった。

コロナウイルス感染症による休校があけた5月中旬，話し合いで学級目標が「日々成長・日々進化～目指せ 最高の6年生～」に決定した。この時，この学級目標を達成するためには，プロジェクト活動の充実が大切であることを児童に伝え，再度意欲化を図った。

## ② 活動の停滞期（6月中旬～）

学校再開後，最初は順調だったプロジェクト活動だったが，6月中旬頃になると，プロジェクト活動は停滞を見せ始めた。その時に児童が以下のように振り返りノートに記した。

○最近，だんだん短期プロジェクトの数が減ってきているような気がします。それに，そんなにやっているのかどうかも分からないプロジェクトもあると思います。もちろんしっかり仕事をしているプロジェクトもあります。だから，1回プロジェクトを見直す時間があつた方がいいと思います。

上記の振り返りから，この児童は学級の問題点を見だし，現状のままではいけないと問題提起して，主体的に学級にかかわろうと考えていると筆者は感じることができた。この児童が指摘する通り，確かにこの頃の学級には，プロジェクト活動に対して一生懸命やる人とやらない人の二極化があったり，活動に変化を加えず繰り返し同じ活動したりするなどが見られた。そこで，この児童の問題提起をもとにプロジェクト活動について話し合いを行った。話し合いの前に「プロジェクト活動は学級に必要か？」と児童に問うたところ，「必要」が7人，「必要ない」が16人，「分からない」が2人だった。話し合いの際，筆者は論点がずれたときだけ介入し，進行や結論は児童に委ねた。図4は，話し合いで出された児童の意見をホワイトボードに記録したものである。話し合いでは，児童が自分の立場を明確にし，なぜそう思うのかの理由を述べ，真剣に話し合っていた。話し合いの途中で，児童にもう一度「プロジェクト活動は学級に必要か？」を問うたところ，「必要」が13人，「必要ない」が7人，「分からない」が5人と変わった。特に，「必要ない」から「必要」に変わった児童にその理由を尋ねたところ，「成長する道筋が減ってしまうのは嫌だなと思ったから」というように，必要だと感じている児童の意見を受けて考え方が変わったようであった。話し合いを経て，学級で出した結論は「今まで通り続ける」であった。しかし，「必要ない」と考える児童が複数いるなかでの結論であったため，その後のプロジェクト活動もうまくいかなかった。

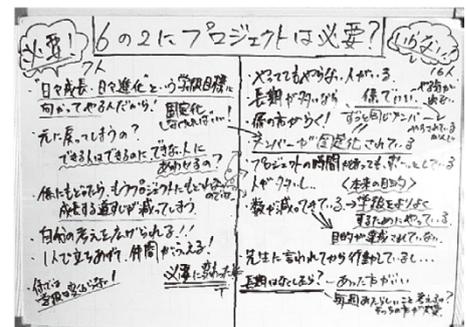


図4 児童による話し合いの記録

話し合いを経て，学級で出した結論は「今まで通り続ける」であった。しかし，「必要ない」と考える児童が複数いるなかでの結論であったため，その後のプロジェクト活動もうまくいかなかった。

③ 活動の転換期（7月初旬～）

7月初旬，児童に改めて「プロジェクト活用は必要か」を問うて，振り返りノートに書かせた。以下は，振り返りノートに記述された児童の考えである。

表1 プロジェクト活動の必要性について児童の自由記述

必要	不要
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級のためにしていると思うと，うれしい気持ちになるから。</li> <li>・5年生の時は係だったけど，つまらなかったから。係活動よりプロジェクト活動のほうが楽しい。</li> <li>・プロジェクトはやらない人が悪い。学級のために全力で考えて実行する人がいれば，6の2は成長できる。</li> <li>・私は悔しい。周りができているのに自分ができないのは悔しい。もう一度挑戦したい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトの時間があっても関係ない話をしたり，読書をしたりと，面倒だと思っている人がたくさんいるから。</li> <li>・いちいちプロジェクトを考えてやるのは面倒。</li> <li>・やらない人が出てくるのなら，全員決められたことをやればよい。</li> <li>・自分のことで精一杯で学級のことは無理。</li> <li>・やはり係の方が慣れている。</li> </ul>

これらの意見をもとに話し合いをしたが，児童だけでは最終的な結論は出せなかったため，筆者が多数決をとったところ，「必要」が6人，「必要ない」が14人，「悩んでいる」が5人であった。多くの児童が「今の学級には必要ない」と回答したため，プロジェクト活動をやめた。しかしその日の振り返りに，「今のままではいけない」「やっぱりプロジェクトがしたい」「自分を成長させたい。だからもう一回チャンスがほしい」と記述してきた児童が複数いた。

7月中旬，複数の児童から「もう一度プロジェクト活動ができるように，学級全員で話し合いたい」と申し出があった。この申し出をしてきた児童は，最初の段階からプロジェクト活動に意欲的で，最後までずっと考えが変わることなく「自分たちの学級にはプロジェクト活動が必要だ」と言い続けてきた児童である。そこで学級活動の1時間で，もう一度話し合いの場を設けた。この複数の児童が進行をしながら，プロジェクト活動の必要性を訴えていると，他の児童の考え方に変化が見られてきた。特に，プロジェクト活動がなくなったことによって「いざプロジェクト活動がなくなるとやりがいがないことに気付いた」，「5年生の時のような学級に戻りたくない」，「自信がなくても学級をよりよくしたい思いはある」，「学級をよりよくするためにプロジェクト活動があるのだから，みんなで同じ方向に進もう」という意見が出された。一人ひとり言葉は違ったが，学級の全員が主体的にこの問題について向き合う様子を感じ取ることができた。

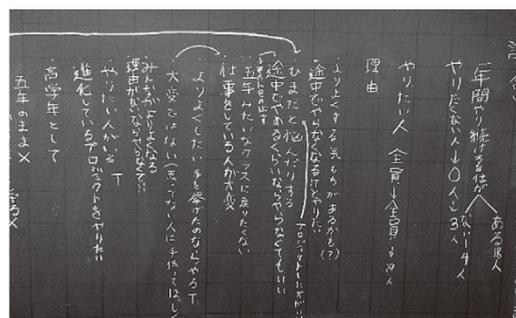


図5 話し合いにおける板書内容の一部

話し合いの最後には，筆者が「本当にプロジェクト活動を最後までやり遂げる自信はあるか」を全員に問うたところ，「最後までやりきる自信がある」と答えた児童は20人で，「自信はないけどやる気はある」と答えた児童が5人であった。（図5）それぞれ理由は様々であったが，学級全員で続けるという意思表示があったので，プロジェクト活動を再開するに至った。ここで筆者は，プロジェクト活動がうまくいかない理由は，PDCAサイクルの活用の仕方の問題があるのではないかと児童と考えた。児童はとかく「D」をすることに目が行きがちで，なぜそれが学級をよりよくすることにつながるのかまで，深く考えるに至らなかったのである。日本能率協会マネジメントセンター（2013）によれば，PDCAサイクルを活用するうえで「重要なことは，過去を振り返り徹底して問題点を抽出したうえで，新たな改善策を考えていくこと」であるとしている。学級経営に置き換えれば，学級をよりよくするための弊害となっている問題点を抽出することで，それを改善するための計画を立てることに必然性が生まれるということだと考えた。そこで新たに提示したのが，図6の「P（問題）PPDCAサイクル」である。このPPDCAサイクルを提示したことをきっかけに，学級のプロジェクト活動は，これまで以上に活発に動いた。児童が問題点をしっかりと抽出するようになり，計画に時間はかかるものの，1つ1つのプロジェクト活動から充実感を感じることができた。プロジェクト活動の時間が終わった時の様子を，ある児童が次のように振り返った。



図6 PPDCAサイクル

学活の終わりの時間に先生が「時間だからやめてください」と言ったときに「途中なのにー！」という声が上がっていて、「ちゃんとプロジェクトをやっている証拠だね」と先生は言いました。私も、5月の頃のプロジェクト活動は、ずっと後ろで考えているだけで、人の役にも立てず…。だけど、今やっているプロジェクト活動は、自分から何をすればいいのか考えられるようになってきました。

この振り返りから、5月から継続したプロジェクト活動が、PDCAサイクル、PPDCAサイクルを経て、この児童を主体的に動かそうとするきっかけをつくったと筆者は感じた。



図7 プロジェクト活動の掲示

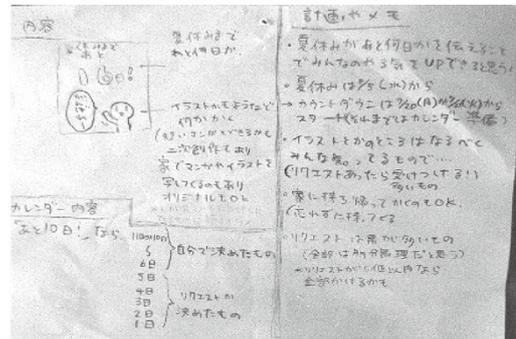


図8 プロジェクト活動の計画書

## (2) 月1回の振り返りアンケート

以下の表は、5月～7月に実施した学級アンケートで肯定的評価をした児童の内訳である。(4月未実施)

表2 月1回の学級アンケートの結果(肯定的評価)

質問項目	4 とてもそう思う 3 まあまあそう思う		
	5月	6月	7月
①私は、学級目標達成へ努力している	20人(80%)	23人(92%)	25人(100%)
②私は、学級をよりよくするための活動をしている	15人(60%)	21人(84%)	22人(88%)
③私は、以前より成長・進化している	20人(80%)	21人(84%)	22人(88%)
④学級の雰囲気がよくなっている	21人(84%)	25人(100%)	24人(96%)

学級アンケートの4月～7月の変遷を見ると、「私は、学級目標を達成するために努力している」、「私は、学級をよりよくするための活動をしている」、「私は、以前より成長・進化している」の項目において、月を追うごとに肯定的評価が増えていった。一方で、「学級の雰囲気がよくなっている」では、21人→25人→24人と、増加後に一旦減少しているものの、5月から7月へは人数が増加していることが分かる。また7月の自由記述の欄には、プロジェクト活動について、以下のような記述が見られた。

7月	<p>○前の自分よりも、学級をよりよくするためにプロジェクト活動を頑張っていると思うし、そのおかげで少しずつ成長進化していると思う。</p> <p>○プロジェクト活動をたくさんしている。新しいプロジェクトもつくった。</p> <p>○2学期は、1学期みたいにプロジェクトがなくならないようにがんばろうと思った。</p> <p>○学級をよりよくするプロジェクトができなかった。もっとたくさんの仕事をこなしてメンバーと協力したい。</p>
----	---

これら以外にも、「先月の自分よりも成長していると感じる」、「先月よりも学級をよりよくするために活動している」という記述が多く見られた。児童の記述とプロジェクト活動の実際を照らし合わせてみる。児童は5月、6月、7月と様々な問題を自分たちで解決しながら、プロジェクト活動を充実した活動にしていったわけで、プロジェクト活動へ主体的に取り組むような姿が多く見られるようになるほど、児童が自分自身の成長を感じたり、自己有用感を高めたりしていると筆者は考える。また、「学級目標を達成するために努力している」の項目が25人(100%)であり、「学級をよりよくする活動をしている」の項目が22人(88%)であるということは、多くの児童が学級をよりよくするために主体的に活動したことで自己有用感を高め、自分の成長や進化を実感したと言えるのではないかと。それは即ち、学級経営の中核に据えたプロジェクト活動が大きく影響したと筆者は考えた。

## 5 全体のまとめ

本実践を通して、プロジェクト活動は、児童が自己有用感を高めながら主体的に学級経営にかかわる有効な手立ての一つとなりえることが分かった。また、それら児童の主体的な行動を誘発するのは、教師が児童にかかわりすぎず、児童を信頼して委ねる場面を多く設けることであり、教師の我慢が非常に重要であると感じた。とかく教師の管理的な学級では、児童に委ねても、児童が動き出すのを待てずに、教師自らがすべてをやろうとしてしまうことが多い。特にこのプロジェクト活動においては、教師があれこれと指示を出し、児童が考えたプロジェクト活動に口を挟んでしまっただけでは、まったく意味がないものになってしまうと思う。成功体験や失敗体験を繰り返しながら、「次はどうしたらいいのだろうか」と考えることが、児童の主体的な行動を継続して促す要因となるのだろう。そのポイントは、PPDCAサイクルと、活動途中での教師の適度で適切な言葉の投げかけである。以下は、7月中旬の、ある児童の振り返りノートの記述である。

今日は、みんながプロジェクト活動で何をいつするかなどの話し合いをしていました。とても学級の雰囲気がよかったです。やはりプロジェクト活動は学級の雰囲気をよくしてくれますし、学級をよりよくするために必要なことだと思います。ですが、プロジェクト活動があるだけでは学級の雰囲気はよくなりません。ということは、一人一人が進んで活動をしているのだなと感じました。

プロジェクト活動が再開して間もないけれど、少しずつみんなが成長し、変わってきているなど個人的に感じました。(中略)自分なりにたくさん努力して、成長していきたいです。プロジェクト活動があるからこそ成長できることを、改めて実感しました。

これらの児童の振り返りや学級アンケートの結果からも分かるように、プロジェクト活動で、児童一人ひとりが主体的に活動することによって、周りの他の児童の主体的な活動を促し、互いの意欲を向上させる。そしてその相乗効果が、自分自身を成長させたり、学級の雰囲気を変えたりする力になる。また、プロジェクト活動で一人ひとりが進んで活動しているということは、当該学級が、児童が安心して活動できる空間であると言える。それは、プロジェクト活動によって自治的な集団が形成されたとも言える。今後もこのプロジェクト活動を学級経営の中核に据え、児童一人ひとりが成長と進化を絶え間なく続けられるような学級を目指していきたい。

## 6 今後の課題

本実践では、プロジェクト活動で児童の自己有用感を高め、主体的に学級にかかわらせようと実践した。しかし、複数の児童は、自分自身が学級目標達成へ努力するところで留まってしまい、その努力を学級への貢献にまで広げるまでには至らなかった。これらの児童は、自分ではプロジェクト活動を作ることはできず、他の児童が作ったプロジェクト活動に所属するという行動が一致して見られた。そうすると、プロジェクト内でも主体的な行動はみられず、他の児童の指示で動く場合が多かった。今後は、これらの児童がプロジェクト活動を自分から作ることができるような手立てを考え、実践していきたい。

## 7 引用文献・参考文献

- 高橋健一『子供たちと共に創る自治的学級－自治的集団を育むサイクル－』教育実践研究、第25集、2015年  
 高橋聡将『児童同士で助け合う自治的学級集団の育成－振り返り活動を中核として－』教育実践研究、第26集、2016年  
 田中耕治『教育評価と教育実践の課題：「評価の時代」を拓く』三学出版、2013年  
 日本能率協会マネジメントセンター『仕事が早くなる！CからはじめるPDCA』日本能率協会マネジメントセンター、2013年  
 平岡信之等『子どもたちの自己評価能力を高める振り返り活動－振り返りシートとホワイトボードを用いて－』京都教育大学教職実践研究紀要、第15号、2015年  
 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』、2018年